

第四章 由来・信仰・講

第一節 神社由来

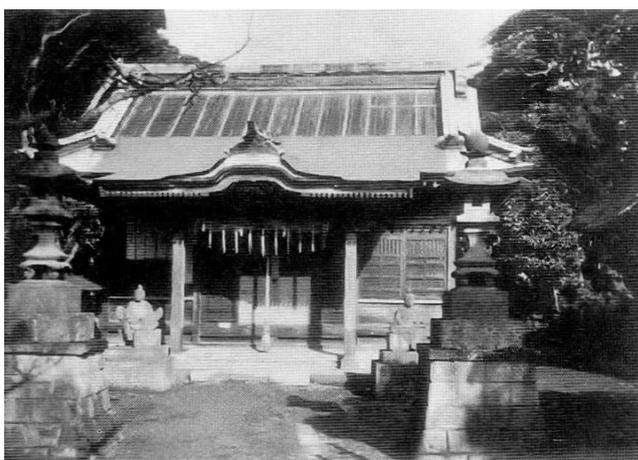
□人見神社（人見）

通称…みょうけんさま

祭神…天之御中主神、高御産巢日神、

神産巢日神

由来…古来より二総六妙見（上総の人見神社・久留里神社・横田神社。下総の千葉神社・印西妙見宮・飯高妙見宮）の一社として人々の篤い崇敬を受ける。



焼失前 社殿



妙見大菩薩

人見神社は北方の海を望む高地に鎮座し近隣一七カ村の鎮守として妙見様の名で親しまれた。平将門が二総六妙見の一つとして建てたとも、平忠常が六妙見として建てたなどの伝説が残る。天正一九年（一五九二）、徳川家康は武運長久を祈り別当であった青蓮寺に五石の朱印を与えたという。

また、元禄四年（一六九二）、当地方の領主小笠原彦太夫長住より太刀一振りが奉納。寛政九年（一七九七）、小笠原兵庫と氏子らの浄財をもつて春日造りの社殿を造営した。そのとき、房州の彫物大工「武志伊八郎信由（通称 波の伊八）」により本殿向拝に龍、脇陣に中国伝説の仙人像の見事な彫刻が製作された。しかし、残念ながら昭和四五

年、浮浪者の火の不始末から本殿もろともに焼失した。

ご神徳…五穀豊穡・開運厄除・除災招福の御神徳をもって知られる。

□厄神社（神門）

通称…やくじんさま

祭神…素戔鳴尊

由来…明治二四年（一八九一）七月二四日「武蔵国荏原郡宇浜川鎮座、浜川神社厄神大神の分魂を人見に奉還す」とある。発起人は佐野庄太郎、守八郎、石井源氏郎三氏のほか世話人として人見・神門より各七名ずつ名があげられている。大正一四年、行政上その他の事情から人見青蓮寺境内にあった公会堂に分社された。

その後、公会堂は青蓮寺の整備に伴い道路を挟んだ反対側の山下八五三・五へ移転した。昭和四五年、青蓮寺境内に青年館が新しく建設されることになり、老朽化した公会堂は解体撤去されることになった。

これに伴って厄神社も移され現在に



厄神社 鳥居新調記念 (昭和 32 年 12 月)

いたる。名前のとおり疫病払いの神様として祀られている。

〔周西地区民俗調査報告書〕

ご神徳…江戸末期（文久・慶応）頃、この辺一帯に悪疫（天然痘など）が流行し猛威をふるった。当時、江戸大森海岸の浜川神社は厄払い、悪魔払いのご利益で評判が高く、祈願のため帆掛け船で東京湾を渡り出かけていたが、冬の寒い時期の参拝が大変だったため



金毘羅神社

神門へ浜川神社を分社したと言われている。また、厄神社には古峯神社と霊亀大神が合祀されている。

□金毘羅神社（人見）

通称…こんぴらさん

祭神…大物主神

由来…人見神社の表門、大鳥居左の石段を上ったところにある。

海上交通の神様として海を照らし、人々に明るい光明を導き与えてくれる福徳の神と言われる。かつて地元の人々が海に生き、海の安全と大漁を願

って篤く信仰してきた。金毘羅神社の創建がいつ頃かはつきりしない。

現在の社は昭和一〇年に再建されたもので、それ以前の社は大正坂のもう少し上の方にあったが、明治四三年（一九一〇）の山崩れで崩壊した。浜の埋立で漁や海苔がなくなつてから金毘羅信仰は薄らぎ、人見神社に参拝する時に寄る程度となっている。明治の頃の話として、金比羅様の明かりを頼りに漁をしたり、航海の目印にした。また、金毘羅様の明りを灯台替わりにした時代があつたようだ。

ご神徳…走水海（観音崎と富津岬を結ぶ線以南の海域、東西幅 10 km の浦賀水道）で弟橘媛が海神の怒りを鎮め奉つたという故事から、海上安全・大漁満足・五穀豊穡の神として農漁村の人々により信仰を集めた。

□古峯神社（人見）

通称…ふるみねさま

祭神…日本武尊

由来…慶應年間と明治にかけて人見一

円に大火があった。記録によると、明治一四年（一八八一）四月から人見・神門地区の代表者が「火防祈願」のため火伏せの神様・天狗の神様として有名な栃木県鹿沼市古峯神社参拝をはじめている。碑文に「明治一七年九月本村講中」とあり、参拝記念として古峯神社の碑を建て明治二六年（一八九三）には古峯神社を勧請し現在地に祠を建て祀った。



古峯神社 小祠

□御嶽神社（神門）
通称…おんたけさん
祭神…神道には、神社神道（神代の時

代）と教派神道（誰か特定の人が教祖）がある。神社神道（木曾御嶽神社）の三柱神は、大己貴命・国常立命・少彦名命。教派神道（木曾御嶽信仰）の開祖は覚明（カクメイ）行者（御嶽山勢至覚明大菩薩）、普寛（フカン）行者（本院院普寛大菩薩）。
由来…神門御嶽神社は御嶽教派系の眞明講社（教派神道）に所属する。
大正一五年、貞元村中富の齋藤吉郎兵衛（祖父が木曾御嶽の信者）が、現在の神社の隣（西側）に米穀店を開き



御嶽神社

商いする一方、病魔を祓い、病人を助け、救うという一心でご祈禱もしていた。医学が発達していなかった当時、お呪いがよく当ることから評判になり近郷近在から御祈禱に来る人が増えた。吉郎兵衛は人望があり、努力と指導によって数年もたたぬうちに多くの信者が参集するようになった。

講社・信者の熱意で神社建設の計画がまとまり、敷地は吉郎兵衛が所有地の一部を提供。資金は吉郎兵衛ほか世話人、関係講者の寄付金で賄うことになり昭和二年三月現在地に御嶽神社が完成した。

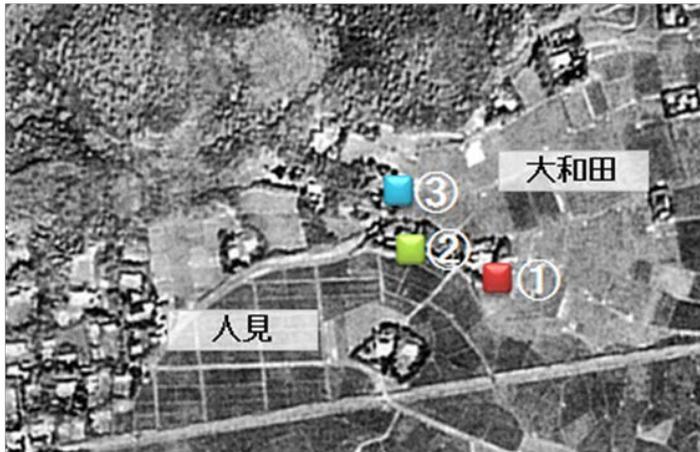
ご神徳…湯立て神事（盟神探湯）後の残りの炭や薪を持ち帰り、門や軒下につるし火難防除や家内安全を祈る。

※参考文献

『周西地区民俗調査報告書』。（我が地域に根付くおんたけさん」守吉男）

□大宮神社（人見）
通称…おおみやさま
祭神…大宮姫命、保食神、倉稻魂命

由来…いつごろの創建であるか不詳。明治以前、大和田の大宮台（写真①）



人見大宮神社の移り変わり

に移祀されたようだ。昭和一〇年八月、現周西幼稚園道路前東側（写真②）、消防第九分団詰所（写真③）のところに移された。立派なお宮でみんなが集まっておこもりするくらい広かった。

その後、昭和五一年四月、道路改修のため現在地（写真③）に再度移された。貞享元年（一六八四）当時の人々



が悪病で亡くなった子供の供養、村人の無病息災を祈ってお地蔵様を建立した。このお地蔵様は「西向の地蔵」とよばれている。

ご神徳…疣（イボ）が治る地蔵ともいわれ、お地蔵様にあげた線香の灰を疣につけてお詣りすると疣がとれるというので参詣する人も多かった。



「イボ」とり地蔵

□日枝神社（大和田）
通称…さんのうさん
祭神…猿田彦命、大山咋命

由来…日枝神社の創建時期は不明だが、享保一七年（一七三二）作成された「新田林畑坂田大和田村大繩絵図面」に「三王」と墨書されていることから神仏習合時より存在していたことになる。



「三王」古絵図(赤丸部)

三王（山王権現）は比叡山の山岳信仰と神道・天台宗が融合した神仏習合の神とされる。明治維新の神仏分離令で、山王信仰に基づき日吉大社より勧請を受け改称された日枝神社（山王権現）は、伽藍、大和田線陸橋の社宅側橋脚部にあった。

昭和四六年、伽藍、大和田線道路工事で神社が沿線にかかるところから撤去



日枝神社（平成 24 年）

された。規模は九尺二間（約二、七m × 三、六m）だった。その後、昭和五年八月土地区画整理事業の二期工事として現在地に新築遷座された。ご神徳…湯の花神事で四方八方に撒いた湯を浴びると無病息災になるといふ。また、使った笹、焚いた後の炭や薪など持ち帰って自宅の門柱や軒下に吊るし家内安全の守りとした。漁業の神様として祀られていた。



坂田八幡神社

□坂田八幡神社（坂田）

通称…はちまんさま

祭神…譽田別命、須佐之男命

由来…大正八年、八幡神社昇格奉告祭の奉額記載に寛永年度に創建、坂田郷の産土神と尊称。

天和年度に内宮再建。文化元年（一八〇四）本殿再建。大正拾五年拾月拾七日神社新築竣工遷座奉告祭。昭和五年九月九日社殿新築。

（『坂田八幡神社』秋元晋著）

また『千葉県神社名鑑』は、元和二

年二月一三日創建と社伝に記すとある。棟札には次のように墨書されている。天和四甲子年

奉拝造本地無量壽如來八幡大菩薩御社
一字所

無量壽如來八幡大菩薩御社一字（現坂田八幡神社の前身？）。地主小笠原彦太夫長住、鍛冶楨善三郎、大工松山市良兵衛、別當長福寺宥山

（『君津市史』金石文）

「無量壽如來八幡大菩薩」の無量壽如來は「阿弥陀仏」。八幡大菩薩の八幡は「武運の神」。神仏習合がなり八幡大菩薩と称された。「御社一字所」ということは「本地御社」一棟の造立に領主小笠原彦太夫長住が関与したことが奉額より読みとれ長福寺が別当だった。

一の鳥居、二の鳥居、朱色の三の鳥居（両部鳥居）を通り石段を上ると正面に八幡神社社殿がある。境内には皇大神宮・天王社・巖島神社が祀られ石段を上ると浅間神社がある。

ご神徳…五穀豊穰・家内安全・商売繁盛・交通安全

〔坂田八幡神社〕秋元晋著

□坂田浅間神社（坂田）

通称…仙元宮

祭神…駿河浅間神社、木之花咲耶姫命
由来…抑當邑仙元大菩薩者萬延元庚申
年天下泰平五穀成就万民安全御地頭様
武運長久先ニ安政五戊午年国中大悪病
はやり候節 奉心願掛候へば村中安全



坂田浅間神社

成被下依つて駿河國富士山頂上普賢岳
砂石請奉神躰成 當村字丸山え奉勸請
仕信敬帰依の輩は悪事災難除 五穀成
就たらしむこと御誓願なり

別当 長福寺

施主 村中

ご神徳…悪事災難除け。 五穀成就。

〔坂田八幡神社〕第二編「古文書と板
額」五 秋元晋著 平成六年作成

昭和四五年一月吉日、仙元大菩薩を
現在地に正遷座した時の碑文には「字
大龍山」と刻印され、場所名表記（字
丸山、字大龍山）に相違があることが
わかった。精査した結果、万延元年（一
八六〇）の古文書「字丸山」は、文政
貳年（一八一九）の古絵図にある地字
名「丸山」である。昭和四五年の遷座
の碑にある「字大龍山」は文政貳年の
古絵図に見当たらず昭和一〇年の土地
法典に「字大龍」があった。つまり、
江戸期の地字丸山が昭和に入つて字大
龍に変わっている。なお「大龍」は「ダ
イリュウ」ではなく「オオダツ」と読

む。オオダツに近い文字をこの古絵図
で探すと「大立」がある。これは当時
の土地法典作成者が「立（タツ） 竜
（タツ） 龍（タツ）」にした瑞祥文字、
もしくはひらがなを漢字読みにしたこ
とに起因する弊害だと推察される。

旧来の地字名丸山が字大龍に変わつ
たことで字大龍山になったのだろう。

従つて、万延元年に遷座された仙元
宮の場所は字丸山（現坂田小学校付近）
で、坂田村中の富士講者が富士山普賢
岳よりご神体（仙元大菩薩）を請け字
丸山に奉還した「富士塚」である。

□天照皇大神宮（坂田）

通称…神明社

祭神…天照大神、豊宇気毘売神

由来…不詳

江戸時代後期、文政貳（一八一九）
己卯年四月の古絵図には、瀧泉山成願
院長福寺 山内 天照皇大神宮の文字
が見える。

建物は間口一間、奥行一間と記述さ
れている。

第二節 寺院由来

□青蓮寺（人見）

本寺は往時、山城国醍醐派報恩院の末寺なりしが、明治一〇年に分離せり、開祖は宥恵、嘉祥元年（八四八）。慈円慈鎮を初祖とし、後西院天皇万治年間（一六五八〜一六六〇）宥永伽藍を建造す。これを中興と称す。

天文九年（一五四〇）、宝曆五年（一七五五）、明治二年（一八六九）と火災に罹り旧記等焼失せり。徳川時代には朱印寺領五石を拝領し、又郷社人見神社の別当職たり。後（ママ）維新の改革により妙見尊と神社とを切り離せり。

〔豊山派寺院案内 人見山青蓮寺〕

「四国八十八ヶ所摸上総国札順巡礼・二十四番（東寺）。真言宗豊山派。」

かつて、木更津長楽寺とともに君津・富津の小糸作に末寺二五カ寺をもつ豊山派の中本寺で古くから格式のある寺として近在に知られている。

元禄七年（一六九四）甲戌二月一



青蓮寺本堂

二日の絵図面には本堂と山門が描かれ大きな伽藍であったことがわかる。

〔人見郷土誌〕

ご本尊の阿弥陀如来は二間塚の與右衛門が江戸中期に献納した。この他に塔中寺院だった大聖寺の不動明王、前畑の薬師堂にあった薬師如来、人見神社観音堂の十一面観世音菩薩、妙見大菩薩が祀られている。



薬師如来



不動明王



地藏菩薩



阿弥陀如来



慈安堂 本堂

□慈安堂（神門）
 本尊…阿弥陀如来（不明確）。
 由来…古老たちが子供のころは草屋根のお堂で拝みを知らない堂守がいた。大正末頃、青蓮寺の御前様と一緒にお経を読んで回る「ほうしんさん（湯



十一面観音

川宝真」という和尚で、長じて慈安堂を任せ世話をたてて堂守を勤めていた。お経など代理ができるようになってからは、神門の共同墓地にお墓を持つ檀徒の葬式や盆の棚行などを行っていた。昭和二三年一月一六日、宝真和尚が慈安堂で七四才にしてこの世を去ったあと青蓮寺の檀徒として元服した形となった。

□大蓮寺（大和田）
 本尊…御腹籠（ハラゴモリ）観世音。
 日蓮宗・浄土宗。

無住寺で木更津撰擇寺の管理。大蓮



御腹籠観世音

寺本堂は、大和田漁業組合が建てたボロボロの草屋根の事務所で、今の大和田自治会館の場所にあった。その後、この建物の架台だけを今の場所に移築したもので内部は変わらない。



大蓮寺（手前：大和田霊園）

□長福寺（坂田）

瀧泉山成願院長福寺は弘治二年（一五五六）、僧隆賢によって開基されたといわれているが、寺伝によるとその前身は平安時代中期に創建された龍泉寺であるといわれている。龍泉寺は戦国時代、北条・里見氏の対立による戦火によって弘治年間に焼失するが、僧隆賢が再建を計画し、現在の位置に建立されるが、長く諸人の幸福を守る寺として寺名を「瀧泉山成願院長福寺」と

したと伝えられる。『豊山派寺院案内』
千葉県第三号宗務支所）
四国八十八ヶ所移し霊場 上総国札
第二十三番。



長福寺本堂

瀧泉山成願院龍泉寺があった場所は、
現長福寺坂下より南東へおよそ二〇〇
m先、旧字五龍というところにあり「龍
泉寺」と称した。寺の東方向に小字東
五龍（ヒガシゴリヨウ）・西五龍・寺家
坂（ジイザカ）などという広い地籍が

あり、その寺の背後、東北方に大龍・
小龍などという龍の字のつく丘陵・小
山などが長く連なっている。

これら広い場所や地籍につく名前よ
り考えると、かつては現在の長福寺の
山号を寺名とした龍泉寺という相当大
きな伽藍があったものと思われる。

その他、この付近には通称鐘搗免（ク
ネツキメン）という田や小字供増免（ク



ゾメン）という相当に広い田があった
ようだ。これらはいずれも寺に係深
い地名である。

本尊の阿弥陀如来は元禄七年（一六
九四）、施主大牧新左衛門および僧宥山
（青蓮寺第一八世住職、長福寺兼務）
の本願により、御婦人多数の方々の合
力献納の浄財によって出来た尊いもの
である。
（「長福寺御由緒」）



観音菩薩 阿弥陀如来 勢至菩薩

その後、徳川八代將軍吉宗の御代ま
で凡そ一八〇年間持ちこたえた堂宇は、
幾度かの天変地変で腐朽し廃滅に瀕し



宮殿(宝暦 11 年寄進)

たので僧宥尚は諸方を勧請し元文三年(一七三八)、現在まで威容を誇った堂宇を再建した。その本堂の規模構造は平屋茅葺五六坪の総檜(ツガ)の柱の方形づくりで、徳川時代末期に瓦葺向背四坪半と同じく奥の院四坪半とが追造されている。

更に宝暦一一年(一七六一)には富右左エ門御袋、喜左エ門内、佐治エ門が発願人となり地頭小笠原熊之助、家老大草三郎左エ門や代官その他坂田村の名主・年寄りなどより勧請されると共に、部落内多数のご婦人の協力によ

その後、薬師如来は薬師堂より、地藏菩薩は地藏堂より移され長福寺で保管管理されている。

現在の本堂は老朽化にともない昭和三八年改築に着手し、昭和四四年に現在のコンクリート製本堂が完成した。



地藏菩薩



薬師如来

り本尊安置の立派な宮殿(クウデン)が寄進された。『長福寺 御縁起考』

明治四四年(一九一一)六月一〇日薬師庵と地藏庵の両堂を本寺へ合併。



旧庫裡取り壊し日 (昭和 40 年 4 月)



旧本堂取り壊し日 (昭和 40 年 4 月)

第三節 民間信仰

□淡島様（人見）

幕末まで小笠原兵庫の陣屋があったといわれる周西幼稚園北側の山裾に小さな淡島様のお宮がある。ここは守治郎右衛門（守喜一氏）によって守られ守家の外屋敷に稲荷様と一緒に祀られている。昔から稲荷さまの御札と二つずつ祀られてきたという。

祭神は少彦名神で婦人病に靈験があるとされる。また、冬になるとその年に使った針を集めて豆腐に刺し供養することでも知られるが、いつ頃からここに祀られたかなどは不明。

山崩れによって倒壊したこともあり



淡島様

何回か再建されたという。

〔『周西地区民俗調査報告書』〕

□日参様（坂田）



日参様 板札

坂田八幡神社の氏子たちにより現在も行われている。神の依代（ヨリシロ）とみられ「日参様」と呼ばれてきた。

方法は、板札に棒を付けた高札が坂田村旧地区内一二〇軒余りの家々を回り順次日参する。板札の首もとに幣束がついていて、以前は賽銭を巻いて隣家へ回したという。お参りを済ませると次の家に回し、次々に継続されて年に数度回ってくる。信仰の起源はわからないが日参とは神社・仏閣に「満願成就を祈って日参する」という意味。日々の暮らしの中でつい忘れがちなお参りを日参様が回ってくることで毎

日氏子の誰かが神社へお参りしたことになり、地区内の安寧と結束を図るため行われたものだろうか。

坂井昭著『南総抒情詩集・南総方言語源考』に日参様について次のような記述があるので紹介する。

”につつあんさまが来なすつた

幣束巻いて来なすつた

ああんもそわねえで黙ってる

囲炉裏（ユルギ）や

煙（ケブ）にいぶされて

ある日 ふわつとやって来る

茶飲んでる時も 飯食っている時も

日参様がいなさるのに

あじしたことだおか？

はあ 誰んも

おめさまのこたあ そわねえな

そりゃ あんつうのかな

妙にこそばいような

村の祭（マチ）みてえに

残さなうちやおえねえって

おっらのどっかで思ってたんだな”

なお、日参様や嘉石様のような民間信仰はよそでは見られないと解説されている。

□嘉石様(坂田)



嘉石様が入った厨子

明治の初めの頃に始まったもので坂田海岸寄りの地区には珍しい石の信仰があったようだ。明治二年(一八八八)の寄附台帳には「教石様」と記されている。その頃、坂田村は総戸数八〇戸位で嘉石様に入っているのは一八軒位だった。一軒に一カ月滞在し毎月一日に厨子を背負って次の家に回す。嘉石様が回って来るとお水、ご飯を供え、線香を三本立て、夜になると灯明を上げる。親からは「箱の中を見ると目が潰れる」と言われていたがこわご

わ覗いてみたら、厨子の中には山の形をした大きさ二〇cm位のピカピカ光った黄銅石のような石と文書が入っていた。文書には回す順番が書かれていたのではないかという。厨子は背負うための肩帯が付けられていて背負って次の家に回した。坂田独特の風習だった。平成二四年四月一日、坂田八幡神社に納めて終了した。

□御霊様(坂田)

お宮の由来については特に記録もなく祀られた時代やその祭神も定かではない。地元では昔から御霊様と言いつづえられ、元禄一四年(一七〇一)の坂



御霊様



御霊様内の石祠

田村絵図にも現在地に森が描かれている。また、文政二年(一八一九)の絵図には森とともに社までも描かれ、そこに「御霊様」と記されていることから少なくとも江戸期には現在地に祀られていたことは確かかなようだ。

この宮を祀る一帯には字東五龍・前五龍・西五龍といったかなり広い地域に渡って「ゴリョウ」という字名が残されており、この宮が相当古くからこの地に祀られてきたことを窺わせる。

天明七年(一七八七)に大前氏より

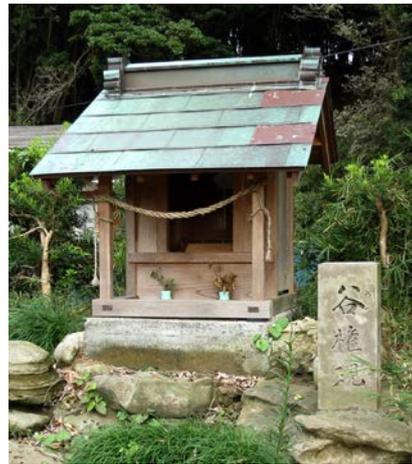
奉納された房州石で作られた石段がある。この大前氏とは江戸期に坂田村の名主を務めた大牧新左衛門のことだろう。

現在お宮の境内地およびその周辺は、牧野家（屋号 善兵衛家）によって管理されている。当家の伝承によれば、その昔、善兵衛家の者が海で手繰り漁をしていたときに木の切り株を網にかけた。それは「捨てても、捨てても」引つ掛かるため不思議に思った当家が拾い上げ、その切り株を御本体として祀ったと言ひ伝えられている。

平成二三年五月吉日、同家によってお宮並びに境内地が改修奉納された。

□権現様（坂田）

権現様は権現塚の上にある小さな祠で、明治の中頃まで耳の病気に非常に効能のある仏神として有名だった。願掛けする時は一本の錐（キリ）を借り、治癒すればそれを倍にして返す。このようなことを繰り返し奉納した錐が大正末頃、見た目には一束位もあった。



『君津町誌』

権現塚にある「権現様」

□お地藏様（周西）

人見地区の「地藏札参り」は仏様を送った直後のお彼岸（春・秋）に仏様の親族が行う仏事で、慈安堂・青蓮寺・大堀薬師堂のお地藏様にお札を貼ってまわる。「よだれかけ」や「たすき」などを掛ける人もいるようだ。

坂田では「地藏札流し」といい四九日に地藏札貼りをする。坂田・人見・大和田まで貼りに行き残りを川に流す。お地藏様の「符打（フダブチ）」は、身内に不幸があると葬儀の後に故人の戒名をお札に書きお地藏様に貼って回

るといふ風習で、身内の人が寺院より「護符」を受け近くのお地藏様にお参りし護符を貼って故人の冥福を祈る。



地藏札流し



◇ご供養

八月は一二日に慈安堂で迎え念仏、一六日に人見橋際で送り念仏を行ない、二四日の盂蘭盆には無縁仏の墓地（現在、君津製鐵所の西門付近）へ行き無縁様の念仏を唱え供養した。

（「のりひび」 石川はつ）

第四節 各種講

講は娯楽が少ない時代の庶民の知恵だった。外出がままならない時代、班を作ったり回り宿などで親睦を深めた。社会の変化や後継者がいないなどの理由で途絶えてしまった講もあり、それらを記録して後世に残すことにする。

□御嶽講（人見）

木曾御嶽山を崇拜する人々による講で平成二六年現在の神門御嶽講（眞明講社）の活動人数は二七三名。内訳は人見七六名、神門一三三名、大和田二三名、中野八名、大堀一八名、相野谷一五名となっている。

御嶽神社の鳥居を入ると境内左側に一二柱の霊神を刻んだ石碑があり、社殿前右脇には初代先達（齋藤吉郎兵衛）を祀る眞明大神の小祠がある。初代先達は御嶽大神を崇拜する熱心な信者だった。御嶽信仰の特異性は「御嶽行者」と呼ばれる行者が存在することで、齋



境内左側に初代から7代まで並ぶ霊神碑
（社殿脇に初代先達を祀る眞明大神の小祠がある）

藤吉郎兵衛師は寶眞行者から寶眞霊神となり、さらに三〇有余年の荒修行に耐えた。のちに御神勅により眞明大神

を拜命された。講社では毎年二月二一日（昭和二八年帰幽）を講祖祭として執り行っている。その後は七代続き、現在は守吉男栄嶽行者が八代目を継いでいる。

御嶽神社の本社は御嶽山の頂上（三、〇六七m）にあり、古くから修験道の霊山として崇拜されてきた。毎年、夏と冬の二回御嶽神社本社へ参拝していたが平成二六年九月二七日、突然水蒸気爆発したので秋の登拝は中止された。



禊場

1、初祈祷

一月九日、年の初めの月次祭（ツキナミサイ）で初講を行う。今年一年の無病息災・家内安全などの初祈祷後、料理が出てお祝いをする。

◆講中廻り

一月一〇日〜一二日、先達が中心になり行人・世話人が組を作って各講中の家々を回り、中敷居様（チュウジキサマ）にお灯明をつけ一年のお清めと無病息災・家内安全を祈願して回る。
一〇日は富津（相野谷）・中野・久保



講中廻り

・中富・大和田を回り、一日は人見地区、二三日は神門地区を回る。

2、月次祭

毎月三回（九日、一八日、二七日）、午後二時より御嶽神社にて月次祭が行なわれる。都合のつく信徒が集まり先達と共に禊祓いと経文を唱えたのちに直会（ナオライ）をする。

3、夏山登拝

木曾御嶽神社への眞明講社の代参は大正初期から開始されたといわれるが、毎年七月二五日〜二七日二泊三日の日程で、三〇人位



毎年夏、御嶽山清滝にて行われる滝行

がバスで夏山の登拝を行なっている。昔は、毎月一、〇〇〇円ずつ積み立てた講金を元にした代参組と平参り組と合わせて四〇人位が参加した。現

在も代参は一部で行われている。

4、秋山登拝

霊神祭（行者が亡くなると霊神として霊神社に祀られるお祭り）をかねて一〇月の第三土曜日と日曜日にかけて登拝を行う。神門から普寛堂前のくろみ沢旅館までバスで直行して八海山と三笠山に登拝し夜の霊神祭に参加して一泊。翌日は霊神社に登拝後、途中觀光をしながら帰る。秋山登拝の参加者は二〇人ほどで、この登拝は平成元年から現在も継続して行われている。

□厄神講

厄神講は人見・神門にある厄神様を崇める人たちによる講。

神門地区では、一月七日厄神社内で拝みあげる初講。毎月七日、厄神社で月次祭を行っている。

講中廻りは一月七日小糸川の右岸地域、一月八日小糸川の左岸地域を世話人数人で地区内講員の家々を浄めて回る。代参は各班より代参者が選ばれ毎年二月二三日、バス一台を貸切り浜川



厄神講 講中廻り

神社に参拝する。
 人見地区では、一月一〇日前後の日曜日に講中廻りをし、一〇月二三日(厄神様の祭礼の日)に世話人二〇人位が集まり人見青年館に祀ってある厄神様を拝む。
 代参は厄神社と古峯神社を一年毎の交代で参拝する。



□古峯講 (人見)

神門地区では、毎年五月の第三日曜日と月曜日に栃木県鹿沼市の古峯神社に代参する。

昔は二泊三日の日程で御籠りしたが現在は一泊二日になっている。厄神講・古峯講は簡素化されながらも講中廻りは両方合わせて行う。



□念仏講 (人見・坂田)

毎月一四日、青蓮寺にご婦人たちが集まり、午後一時〜三時まで一〇人くらいで十四日念仏を行っている。

総名様を中心に、指揮をとる人、鉦を打つ人、太鼓をたたく人の合図に従い皆でお念仏を唱え、お念仏が終わったらお茶菓子をいただきながら談笑する。

坂田でも鉦を鳴らして唱える念仏講が平成二〇年頃まであった。

□妙見講 (人見)

妙見講は気の合う人と班を作り回りで月一度講が持たれている。

集まる日は特に決まっていなくて、妙見様の掛け軸が回ってくるの良い日を選び妙見講が持たれる。

中央 「御衣替御神像」
 右より「上総國人見山鎮坐」



十四日念仏 (青蓮寺)





妙見講

妙見様の掛け軸を床の間に掛け、お灯明と線香をあげて妙見様のお真言を唱える。その後でお茶を飲みお菓子をいただくながら話をする。昔に比べると簡素化されている。

□お庚申講（人見）

地域のご婦人の話では、昔は気のあった六人で一組の講を作っていた。枕を持ってきて一眠りしてまたお喋りして一晩中語り明かした。宿は春三回、秋三回の六回開き順番は暮れにクジ引きで決めた。一番か六番がいい

ようよ”とおしゃべりしながら線香をたいて庚申の絵を拝んだ。

お庚申講掛軸は、中央上部に六本の手をもつ青面金剛童子が鬼を踏みつけて立ち、両側に童子、上部に日月、下方には「見まい、聞くまい、語るまい」



の三匹の猿と二羽の鶏、白黒青黄の鬼（薬叉）が描かれている。

また、お庚申講には男組もあつた。六人で講を作つて高台の膳にご馳走をのせ、飲み食いして夜を明かしたとのことである。

現在、お庚申講は人見に三軒一組ある。当番の宿にその都度集まり、前の家から回ってきたお庚申像の掛け軸を中敷居様に掲げ、お灯明とお線香を供えて拝む寄り合い的な講で現在も行われている。

大和田・坂田も昔はあつたが今は行われていない。近隣の中野・貞元は、お庚申講を行なっていないかつたようだ。

□子安講（大和田・坂田）

大和田では婦人部（一三名）が大蓮寺に集まつて毎月第一日曜日に行つてゐる。「子安神様」の掛け軸を飾り座談会後お念仏をあげ直会をする。

明治時代は講仲間も大勢で、掛け軸は各家に持ち帰り回り宿で行つていた。大正時代の初め頃、疫病がはやり、その時、講に入つてゐる家は無事に済んだが、講から抜けた家では大変だつたと伝えられている。子供を授かるとお供え物をして安産の祈願をし、子供が生まれた時もお礼（あげがえし）の報告をしたが現在には行われていない。

御開帳の時は晒（サラシ）が御本尊様と回向柱との間につながれ、御開帳が終わったら、この晒を少しずつ切り分けていただき、五色の糸とさらしの切れ端を腹帯の中に入れて安産のお守りにする。子安講は霊験あらたかなの



子安講 (大蓮寺)

で、祖母の代より「止めてはおえね」と言い伝えられている。掛け軸は、

札所 三十九番 大蓮寺

蓮葉の いとよるべの 観世音

御法のにはに いまぞ大和田

(観世音菩薩御詠歌)

「権僧正 鈴木乗繁」

となつている。

歴代住職一覧で確認すると、一九世乗繁僧正(昭和二三年二月二八日寂)



がおられるので比較的新しい年代に新しく作り替えられたのかもしれない。

坂田の子安講は、広い地域で講が持たれていたようだ。既婚の若い女性が回り宿に集まって子安神を祀り安産を祈願する。その後、ご馳走をいただきながら世間話をして一日過ごす。

現在、回り宿はなくなったが信仰する人達で行っている。子安神の掛け軸が回つてくると、その家では床の間に掛け軸をかけてお茶とご飯をあげお線香をともして祀り、一ヶ月経つと次の家に回す。

掛け軸は、

右側に「上總國周集郡子安村」中央に



子安神様の絵図、左側には「神主」、下に「安産大明神」と書かれている。
※子安講は人見でもあったが、現在は行われていない。

□山倉講(大和田・坂田)

山倉大六天を信仰する講。香取郡山田町にある観福寺は山号を山倉山といひ、弘仁二年(八一)に悪疫退散のため大六天を勧請したのが始まりといわれ大六天王が祀られた。関東三大厄除大師の一つに数えられている。

昔、疫病が流行り困っていると山倉山観福寺のお坊さんが持つていた干した鮭を食べさせたら病気が完治した。それから観福寺に参拝する様になったという説がある。戦前、大和田・坂田地区には厨子を背負ったお坊さんが「ヤマクラサマ」のお札を持って家々を回り売り歩いてきた。香取への代表は、戦前から引き続き今でも旧地区の代表として三軒ずつ、毎年お参りに行っている。

観福寺の近くに栗山川があり今でも

鮭が産卵に遡上する。

□百万遍講（人見・坂田）

人見では、みんなが輪になって座り、百万遍数珠を回して祈りを捧げる。この数珠は直径二、五cmほどのジュズダマを繋ぎ合せて作ったもので長さ七m余ある。長老が鳴らす鉦の音に合わせて「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えながら数珠を回して行く。この数珠の中心に当たる所に一カ所だけ四、五cmの大きな玉があり、この玉に触れた人は頭を垂れ、玉を押し戴くようにしてお祈りする。昔から引き継がれてきた百万遍数珠の風習も総名さんや講者の高齢化で行われなくなった。

坂田でも毎月二五日には地区毎に宿を決めて集まり、大きな数珠が一〇〇個付いた輪を回しながらお念仏を唱える百万遍念仏が行われていた。

□富士講（坂田）

私たちが参加したのは、昭和三〇年代のはじめで、止めたのは昭和四〇年代だったと思う。秋香園の「ののさん」

が、官司（免許はない）の代行をし、奉斎の儀一切を執り行った。坂田全体が講者（一〇〇人程度）で、班は、一班約三〇人、三班構成だった。

参拝は、各班持ち回り。三年で富士山を参拝し、一サイクルが終わると御嶽山を参拝する。これを二回行い二二年間で終えた（一班が終わったら翌年二班、翌々年に三班が行く）。旅程は何れも二泊三日で、旅費は講者の積立と御賽銭で賄った。

□成田講（人見）

成田のお不動様を信仰する講。女性だけ月一回の回り宿で、平成二三年まで行っていた。人見には二組あり、石井さんの組は元講と呼ばれた。昭和二九〇三〇年頃は一三軒あつたが、そのうち少しずつ抜けていき四軒になった。もう一組は四軒位で現在も続けているようだ。毎月一三日、宿が回ってくるので使う器は一二個用意し自分の器は色が違うものを別に一個用意した。

掛け軸、経典は無く、御本尊の石像

を拝み、そのあと御馳走をいただきながらお話しする。若い人たちに入講を進めても加入者がいないため講を終えた。御本尊は木箱に入った小さな石像で、それを背中に担ぎ四人で成田山にお参りし納めた。

□昔の成田講（人見）

人見では明治二〇年（一八八七）頃から成田へお参りに行った。そのために講金を出し合つて積み立て、クジを引いて当たったものが代参として成田へ一泊でお参りに行った。記録も残っているという。全戸が加入していた時代もあつたようだが、昔は男たちが先達をやり、その中心となっていた。

□大山講

かつては、大山の御師たちが正月明けに、その年の米や豆など穀物の収量を占う筒粥（ツツガイ）神事にもとづく「ツツガイ表」とお札を配って歩いた。それがよく当たるといふことで農民たちに信頼され利用された。坂田でも配札人が来て札を配って歩いた。そ

の札は苗代にたてておいたという。

大山の神は阿夫利（アブリ）神社に祀られ、山頂には奥社、中腹に本社、また大山寺がある。大山は別名「雨降山」とも呼ばれ、降雨の利益があるといわれた。大山講は昭和四〇年代、田圃がなくなるまで行われていた。

□月次祭（大和田）

日蓮宗の信者で行なっている。個人の家（宿）持ち廻りで掛け軸を掛けて祀っていた。

□和讃講（人見、坂田）

人見は、女性を中心に毎週土曜夜（七時～九時）、青蓮寺に集まり、和讃教本の練習をする講。堂守さん（現住職の御母堂）が先達の頃は盛んで二〇人ほどいたようで、お盆のお施餓鬼やお寺の行事には活躍したとのことである。

昭和五三年から毎年十一月、青蓮寺を会場にして和讃の検定が実施されるようになった。

坂田では、昭和五七年ごろ檀家の方々に呼びかけ、長福寺で和讃講が始

まった。その頃は一五名で平均年齢五

五歳だった。毎日曜日の午前中が練習日だったが、皆さん熱心で、お寺に来る日が楽しみだといっていた。教典を開き、おつとめの作法はちよつと難しいが、大きな声でお経を唱える時の気持ちは、本当に清々しくありがたい思いでいっぱいだった。盆暮の施餓鬼会、御影供会の法要の時には、僧侶たちの読経と共に荘厳な中にも華やかさを添えました。人見と坂田は同じように検定を受け和讃の交流もあったが、平成二〇年頃に終わった。

長福寺 小糸作札

観世音菩薩御詠歌

第三十七番

のりの道願ふ心は長福寺二世安樂を
なほもいのらん

薬師如来御詠歌

第二十四番

老の身はさかだときけばかるからじ
今思ひしる後の世のみち

△和讃と御詠歌

お盆には施餓鬼供養和讃、導師入場時に総本山長谷寺和讃、退場時に如来和讃を唱える。ご詠歌とは仏教の教えを五・七・五・七・七の和歌（みそひともじ）として旋律Ⅱ曲にのせて唱えるもので、ご詠歌も和讃の流れをくんでいる。日本仏教において平安時代より伝わる宗教的伝統芸能の一つ五七調あるいは七五調の詩に曲をつけたものを「和讃」と呼び、広い意味では両者を併せて「詠歌」として扱っている。

（聞き取り 石井喜久枝）

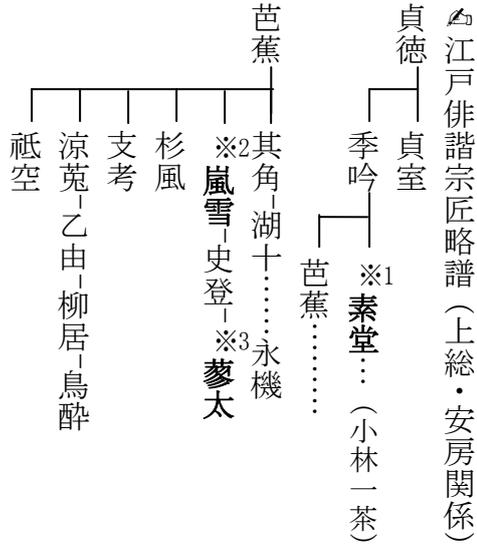
△俳句の世界から見た君津

小林一茶が文化一四年頃まで、毎年のように行脚していることは有名ですが、その他にも多くの江戸の宗匠達が訪れている。

小糸川流域も古来俳諧が盛んであつたらしく、寺社に残る句碑や句額から多くの宗匠達の名前を知ることができ。大別すると、服部嵐雪を祖とする雪中庵の系統、杉山杉風（スギヤマサ

ンブウ)を祖とする採茶庵の系統、山口素堂を祖とする其日庵の系統、さらに芭蕉晩年の弟子である中川乙由(ナカガワオツユウ)を祖として白井鳥酔(シライチヨウスイ)に始まる春秋庵の系統等がある。

維新後はその内の春秋庵と宝井其角の流れをくむ穂積永機(ホズミエイキ)の其角堂の系列がある。これらの系統に属する宗匠達がこの君津に来て地元の人々を指導した。



△地域に残る俳人の句
 ※1 山口素堂(一世)
 // 目には青葉
 やまほととぎす

初鯉”
 小糸連中句碑(六手八幡神社)

※2 服部嵐雪(初代雪中庵)
 // 梅一輪
 一輪ほどの
 暖かさ”

※3 大島蓼太(雪中庵三世)
 // 立さ禮者(レハ)
 末太日盤高(マタヒハタカ)し
 婦(フ)ちの花”
 雪中庵蓼太句碑(釜神公民館)

// 世の中は
 三日見ぬ間に
 桜かな”
 // 五月雨や
 ある夜ひそかに
 松の月”

△坂田八幡神社奉燈句集
 大正期坂田には俳句を趣味とする人たちの集まり「白雨社」があった。四季折々其角堂宗匠を中心にして神社に集まって句会が催された。その中に七句が収録されている。

- ・ 初夢に願ひし神乃阿らわるる 南湖
 - ・ 鶯も歌え初音の店開き 秋保
 - ・ 谿して石割る音や菊の花 寿仙
 - ・ 涼しさや竹の影置くあら畳 旭
 - ・ 秋立つや畔戸の海乃うらおもて 藤の家
 - ・ 志ら菊や浮世の塵に染まぬ色 素耶
 - ・ 刈らぬうち種の無心や稲の出来 ゆた可
- (資料集 『坂田八幡神社』秋元晋著)



出羽三山参拝記念
坂田講者（平成4年 羽黒山）



御影供
富津市小久保真福寺（平成27年）